

協同的に課題を解決するための「切り抜き新聞」作成 広島県立呉三津田高等学校

1 活動概要

本校の「総合的な学習の時間」では、協同的に課題を解決するための方策の一つとして、1年生1学期に「切り抜き新聞」づくりに取り組んでいる。これは、世界の諸課題をテーマとして選び、4～5人の班で壁新聞を作成するものである。中国新聞社主催のコンクールに応募するとともに、同じ作品を9月の三津田祭（文化祭）でも展示し、来校者に投票で優秀作品を選出して頂いている。

2 本実践事例について

(1) 本事例実施の背景・これまでの取組

1年生の1学期に、「詩のボクシング大会」と平行して実施している。高校生として、改めて社会に対する興味・関心を高めるとともに、自己の進路探究に結び付けていくことも期待している。

小・中学校で作成した経験のある生徒も増えてきたが、その多くが個人で取り組んだものである。本校では、それをグループで作成させることにも意義があると考えている。入学間もない時期であるが、新しいメンバーで一つの課題に向けて取り組ませることが、他の学習活動や特別活動などでも学習効果を高めると考えている。

また、公民科「現代社会」の導入部分にあたる「現代の諸課題」からも働きかけを行うなど、教科・科目との連携も図りながら進めている。

(2) 指導のポイント

- ☆ 世界の諸課題をテーマに様々な角度から探究させることで、多面的・総合的に考えさせる。（付きたい力1）
- ☆ 一つの課題達成に向け、お互いを理解するとともに、相手を尊重しながら、協同的に課題を解決することを体験させる。（付きたい力2）

3 学習指導案

◎本時の授業…「新聞テーマの設定」(1時間)(単元全体では8時間程度)

(1) 本時のねらい

- 持ち寄った新聞記事を検討することで、さまざまな視点があることに気付かせる。
- テーマ設定に向けた協議を重ねることで、協同性を高めるとともに、他者の意見を取り入れ、自分自身の考えをいっそう深化させる。
- 過去の最優秀作品を分析させることで、思考力・判断力を育成する。

(2) 対象学年 第1学年

	学習活動	指導上の留意点	評価
課題把握	○日程確認(ワークシート利用)	○ルール確認(作成期限の厳守) ○取組期間の確認	知識・理解 思考・判断
自力解決	○各自が持参した記事の説明 (個人の課題意識を発表)	○時間制限をかけ、簡潔に進める。	表現力
集団解決	○過去の最優秀作品の分析 作成のポイントを協議する。 ○テーマ設定 ポイントを再確認したうえで協議 ○作成上の課題の把握 現状で不十分な点などを把握する。 ○役割分担・準備計画	○記事内容・レイアウト・視点など さまざまな観点からの分析を促す。 ○高校と小中学校との作品の違いに についても検討させる。 ○今までの協議をふまえ、より高い次 元で設定できるようにする。 ○自分の進路志望との関連も推測さ せる。 ○ワークシートを利用	思考・判断 技能・表現 関心・意欲・ 態度
まとめ	○課題の再確認 ○自己評価(本時)	○次回までの課題の確認	

4 生徒の反応(授業後の感想等)

個人ではなく、グループ作業だったことに少し戸惑ったが、できた新聞が表彰されてうれしかった。

自分が希望する進路に関係するテーマだったが、新聞記事で理解が深まったし、班員のアイデアやレイアウトのうまさに感心させられた。

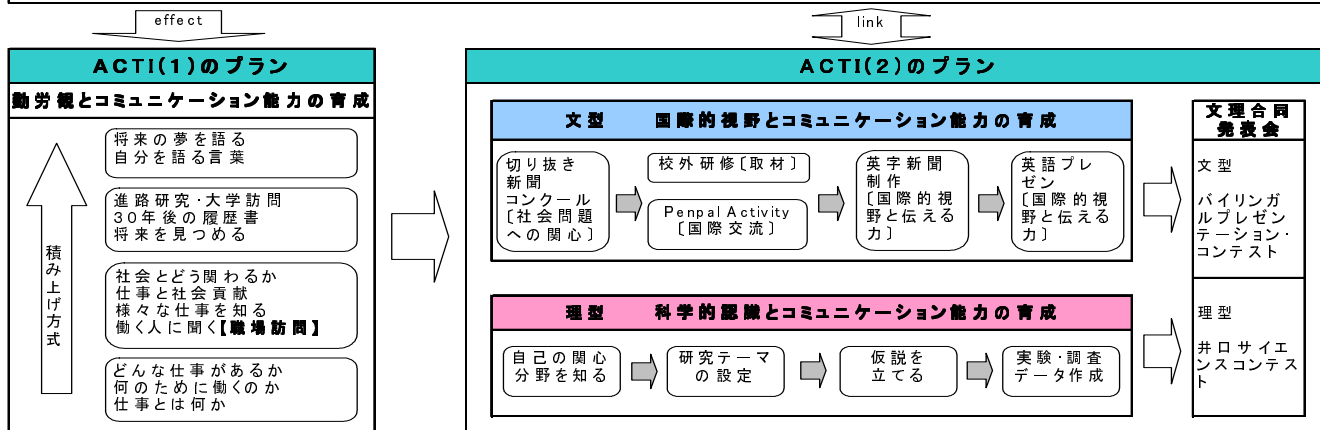
多面的総合的な視点をもつための切り抜き新聞制作

広島県立広島井口高等学校

1 活動概要

【国際交流】のプラン

- ① 海外姉妹校との現地交流（ハワイ修学旅行・オーストラリアホームステイ研修）
- ② 海外からの訪問受け入れ（姉妹校からのホームステイ・留学生等の受け入れ）
- ③ 国際交流事業への参加（ユースイン広島・青少年のための国際セミナー・イングリッシュキャンプ・ユニタール青少年大使等）
- ④ 各種コンクールへの参加（英語スピーチコンテスト・英作文コンテスト等）



本校の総合的な学習の時間（ACTI）は2年間を通してESDを実践すべく全体の学習プランが組み立てられている。1年次では社会と自分との関わりを見つめつつ、「環境」「エネルギー」「政治」「経済」「教育」「人権」など様々なテーマを取り上げ、自分がどのように社会に貢献しうるかを考えさせる。2年次では、文系は国際社会に、理系は自然・環境に視野を拡大させ、協同的に課題を解決するための様々なプログラムに沿って体験的な学習をさせている。また、生徒の興味関心を広げたり、より高い志を持たせたりするために、学校独自の国際交流プランともリンクさせている（上図）。特に、2年文系のACTIでは、社会の諸問題について協同的に解決策を模索することと、国際交流を通じて異なる立場を理解することの二つがスパイラルを描きつつ発展深化するよう学習計画が作られている。

2 本実践事例について

（1）本事例実施の背景・これまでの取組

「切り抜き新聞」制作は2年文系のACTI最初のプログラムである。1年次の自己と社会との関わりを見つめる学習から、より多面的総合的な学習へと発展させるため、グループで社会の諸課題について考察する。「国際・人権・環境」「政治・経済・法律」「医療・看護・福祉」「教育・歴史・文化」という4つの分野の中からそれぞれ関心の深い分野を選択し、各分野の中でグループを形成する。

昨年度までは、「切り抜き新聞」の学習は社会への関心を深めるきっかけとなるに止まり、その後の学習との関連が薄かったが、今年度からは「切り抜き新聞」の学習で発見し考察したテーマを、「英字新聞」及び「バイリンガルプレゼンテーション」(注)の学習に発展深化させようと全体を再構成した。「切り抜き新聞」から「バイリンガルプレゼンテーション」までのプログラムに含まれる全ての活動がスパイラル的に一本の太い線上に並んだわけである。作品も地元新聞社主催の新聞コンクールに応募するだけでなく文化祭でも展示した。

(注) 一年間探究したテーマについて、英語によるプレゼンテーションを行う。パワーポイントデータは日本語で作成。

（2）指導のポイント

- ☆ 各グループが個別のテーマを設定する際、持続可能な社会の実現にむけての課題を意識させるとともに、簡単に解決できない問題について様々な角度から多面的に考察させるため、異なる主張の記事を収集整理させる。(付けたい力1)
- ☆ 多様な立場や考え方の違いに気付かせるとともに、違いを認め、相手の立場や考えを理解しながら議論していくことを体験させる。(付けたい力2)
- ☆ 年間を通して継続して探究活動を行うとともに、それを発信することによって周囲や社会と問題を共有し、解決に向けて協同的・主体的に行動する姿勢を身につけさせる。(付けたい力3)

3 学習指導案

◎本時の授業…本実践は4つの分野に分かれた生徒が4～5人のグループを作り、各分野の領域内でグループ個別のテーマを設定した後、関連する新聞記事を収集し、自分達の考察と合わせて「切り抜き新聞」に再構成するという学習である。

(1) 本時のねらい

- 新聞を読むことによって社会の諸問題に目を向け、年間の研究テーマを設定する。
- テーマに関して様々な主張に触れたり議論したりする中で、多面的総合的な見方を知る。
- 異なる立場を理解した上で協同的に課題を解決する力を身につける。

(2) 対象学年 第2学年

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入	1 「切り抜き新聞」について知る。 2 新聞を持ち寄り記事を読む。	・「切り抜き新聞」のねらい及びコンクールの要項について説明する。 ・前年度の作品が掲載された地元新聞社の号外を配布する。	学習のねらいを理解している。
展開1	3 自分達のテーマを設定する。 4 新聞記事を収集する。	・年間を通して探究し、英字新聞やバイリンガルプレゼンテーションにおいても発信できるテーマ・内容を意識させる。 ・異なる意見を広く収集させる。	年間を通して探究できるテーマを設定している。 記事を収集している。
展開2	5 記事を整理しながら、それらを元に何を課題として提起するかを議論する。 6 議論を通して自分達の立場や主張を明確にする。 7 考察したことをまとめ記述する。 8 切り抜いた記事や考察の配列及び見出しを考える。 9 台紙に記事を貼付したり考察を書き入れたりする。	〔「癌について」の場合の指導例〕 ・なぜ癌について調べたいのか、何を問題提起したいのかを明確にさせる。 ・記事はKJ法を用いて整理させ、内容を取捨選択させる。 ・見る人にわかりやすく、かつアピールできる紙面作りを考えさせる。 ・「早期発見の重要性」という主張を支える根拠を明確にさせる。	課題や主張を明確にしている。 班員で協力して議論や作業を行っている。
まとめ	10 出来がった作品についてプレゼンを行い、自己評価・相互評価をする。 11 文化祭で展示した後、コンクールに応募する。	・バイリンガルプレゼンテーションを意識して発表させる。	発表の仕方を理解している。

4 生徒の反応(授業後の感想等)

同じ分野でも関心のあるところがみんな違って、新聞やプレゼンテーションに違いが出た。それが面白かったし、視野が広がった。

実際に行動するという事はACTIを通してでないといけない貴重な体験で、沢山のことを吸収できた。

切り抜き新聞は、正直最初は面倒くさかったけど、完成した時、さらに入賞できた時の達成感が面倒くさいこととは比べものにならないくらい大きくて、みんなで頑張れて良かったなと思った。

医療18班



グループテーマ

「癌について」

「みんなの新聞コンクール」佳作



オーストラリアの多様性を理解するための調べ学習

広島県立安芸府中高等学校

1 活動概要

本校では国際科2年生が毎年8月下旬に10日間の日程でオーストラリアを訪れ、ホームステイや姉妹校との交流を行っている。その事前学習として、国際科の独自科目「地域研究」でオーストラリアの地誌・文化・社会について自らがテーマを決め、インターネット・文献・新聞記事を手がかりに課題の設定と解決策を提案するため1600字程度のレポートを作成する。そして、4グループに分かれて発表会を行い、選出された代表が三重大学とのテレビ会議に臨んで講評を仰ぎ、意見交換を行う。三重大学のオーストラリア留学・旅行経験者から貴重なアドバイスを受けることもある。

生徒の取りあげるテーマは衣食住などの文化、スポーツ、環境問題、少数民族の人権、日豪関係の歴史など多岐にわたっていて、事前学習の内容としてもきわめて重要なものが含まれている。オーストラリア研修旅行とその事前の取り組みは「持続可能な社会」の実現をはかるための課題を発見し、議論を進めながら共同的に解決を探っていく「ESD」の視点に立った内容となっている。

2 本実践事例について

(1) 本事例実施の背景・これまでの取組

オーストラリア語学研修旅行は国際科最大の行事である。これまでの授業で培ってきた英語によるコミュニケーション能力を実践的に試す場であり、さらに国際理解を深め、自らが課題解決のために主体的に行動できる力を育てる場でもある。「地域研究」は日本語によるプレゼンテーション能力を高めるための授業であるが、英語の表現力をつけていくためには豊かな日本語の表現力も求められることを学んでいく。

オーストラリアと日本の関係は、第二次世界大戦、白豪主義政策、捕鯨をめぐる摩擦などにみられるように、いつも平和的な関係ばかりではなかった。調べ学習は素顔のオーストラリアを知り、重要なパートナーとして友好的な関係を持続・発展させるために貢献しうる主体の形成をめざす授業である。

(2) 指導のポイント

- ☆ 調べ学習を通じてオーストラリアにおける先進的な環境問題への取り組みに関心を持たせ、深刻な問題である「フロンガスによるオゾン層の破壊」「地球温暖化とオーストラリアの乾燥化」などを解決していくため、日本の果たす役割について多面的・総合的に考えさせる。(付けたい力1)
- ☆ 調べ学習を通じてオーストラリアの歴史・文化に関心を持たせるとともに、内外でプレゼンテーションや議論を通じて文化の違いを理解・尊重する態度を育てる。(付けたい力2)
- ☆ オーストラリア語学研修旅行後、調べ学習やテレビ会議で学習した内容が実際の現地における体験で検証できたか、あるいは深まったかを記録するために「感想文集」を作成し、来年以後の研修旅行、調べ学習に活用するための課題を整理する。(付けたい力3)
- ☆ インターネットを使っでの情報収集に偏ることなく、文献、テレビ番組、新聞や聞き取り(ALT、オーストラリア留学経験者)などを通じて、信頼性の高い情報を集めるシステムを構築する。(付けたい力3)

3 学習指導案

◎本時の授業…本授業は「地域研究」のほぼ1学期すべての時間を使って展開する。オリエンテーションにはじまり、テーマの決定、資料の収集と選別、1600字要旨の作成、発表会、そして三重大学とのテレビ会議で終了する。地歴公民科の4名で担当する。生徒は4つの班を構成する。

(1) 本時のねらい

- 多様なオーストラリアの社会・文化への理解を深め、自ら探した課題を解決していく態度を身に付ける。
- 自らの意見をわかりやすくプレゼンテーションに表現し、他者の意見を取り入れながら日本語による豊かなコミュニケーション能力を養う。

(2) 対象学年 第2学年

	学習活動	指導上の留意点	評価
課題把握	【オリエンテーション】 「クイズ・オーストラリア (30問)」に解答し、自己採点を行う。 次の時間に資料を配布し「オーストラリアのプロフィール」を担当者が解説する。	得点を競うのが目的ではなく、関心のあるテーマを絞り込むためのオリエンテーションとして位置付ける。	得点は評価の対象としない。
自力解決	関心のあるテーマをいくつかあげて、担当教員や班員に相談しながら研究したいテーマを決定する。	訪問地のシドニーに限定せず、オーストラリア全域をテーマの対象とする。	将来も発展的に研究できるテーマを考えている。
集団解決	1 おもにコンピュータ室と図書室を使い、テーマについて調べ学習を進める。 2 完成した1600字要旨を教員も含めた班で読み合わせ、誤字、内容の誤り、わかりにくい表現を修正する。 3 班ごとに発表会を開き、生徒相互で採点し合い、最後に反省会を行う。	担当教員がテーマを選んだ理由について聞き取りを行い、調査や資料収集についてのアドバイスをする。 あらかじめ評価用紙を配布し、採点基準を確認する。教員も採点に加わる。	テーマを選んだ動機をはっきり述べている。 しっかりした資料の解釈ができています。
まとめ	班別発表会で選ばれた8名が、三重大学とのテレビ会議で発表を行う。講評・感想を受ける。	翌週の時間で今回の学習の成果と課題を話し合わせる。感想文集作成の打ち合わせを行わせる。	

4 生徒の反応 (授業後の感想等)

発表するときのポイントとして自分が伝えたいことは何か、どんな表現が適しているかを考えたうえで、よりわかりやすくするためにテーマ別で分けたり、1つのテーマをいろんな角度から見たり調べたりするとよいことを学んだ。三重大生の意見に共通しているのは、調べたことはすべてが本当とは限らないし、実際に経験することで新しい発見も想像以上の驚きもあるということだと思う。調べたことについて、常に疑問をもって話し相手を意識することで、より一層深いものになることを知った。ありがとうございました。



「総合的な学習の時間」のE S D授業実践

広島大学附属高等学校

1 活動概要

本校の特徴的なE S D実践（()内はテーマ）としては、以下の3つを挙げることができる。

- (1) S S Hの海外・国内研修や課題研究（キッチン・キットサン，LED，バイオエネルギーなど）
- (2) 高校2年の「総合的な学習の時間」（F S C認証制度，フェアトレード，カーボンオフセットなど）
- (3) ユネスコ委員会やユネスコクラブの活動（節電活動，エコキャップ活動など）

いずれの実践も、現代の産業社会を持続可能性の観点から見直すことでは共通しており、今後もこれらの実践が生徒・教員間、生徒間の発信や交流によってつながっていくことが望まれる。

また、教科間の連携や協力について話し合う機会が増え、その成果を授業として実践しているものもある。3年前には化学と政治経済の教員が、それぞれの視点からバイオディーゼルの是非について問うティームティーチング授業を行った。それ以降も、E S Dの内容を深めるために教科の枠を超えた実践を行うこと、節電活動など生徒の自発的な実践をより科学的なものに高めることを課題意識とし、教材開発や委員会・クラブ指導において取組を続けている。

2 本実践事例について

(1) 本事例実施の背景・これまでの取組

本時では窒素循環について考える教材として茶栽培を取り上げた。それは、持続可能な社会の形成、特に農業やエネルギー問題に関して、新たな視点を提供し多面的に考えるためである。バイオディーゼルの授業のように、生物由来の有機化合物からエネルギーを取り出し、持続可能な炭素循環(カーボンニュートラルなど)を構築する授業実践は充実している。しかし、窒素循環に関する授業実践は少なく、生徒の認知度も低い。

そこで、窒素循環の管理が課題とされている茶栽培を教材に、持続可能性を考える授業を構想した。生徒には、緑茶飲料について茶園の環境負荷とのつながりを知り、生産者と課題を共有し、フードシステムや自らの日常生活を問い直すことを期待した。

本授業は、茶栽培(地歴公民科)、窒素循環(理科)、有機J A S認定(家庭科)、硝酸性窒素の健康被害(保健体育科)など、様々な教科の既習内容や専門科学を取り入れ、「総合的な学習の時間」に特有のE S D実践として提案するものである。

(2) 指導のポイント

☆環境保全対策を、外部不経済ととらえ、行政による解決を目指すだけでなく、環境保全活動を「付加価値」とする立場から有機栽培茶のマーケティングを再考させる。そうして多面的な見方で解決に取り組むための新たな視点を提供する。(付けたい力1)

☆茶園で生じる環境負荷(N_2O の発生、水質汚染など)については、産業社会における生産者の社会的立場づけを考慮して評価させたい。とくに、消費者の嗜好や飲料会社の戦略との関係を具体的に学習し、なぜ多肥という判断を下したかを、生産者の立場に立って考えさせる。(付けたい力2)

☆茶園で生じる環境負荷を、生産者(茶園・飲料会社)、消費者(市場)等が形成するフードシステム、および外部環境(地形、気候、生態系)としてとらえさせる。C Mづくりでは、フードシステムのどの部分を変えたいかを具体的に表現させる。(付けたい力3)

3 学習指導案

◎本時の授業…本実践は、総合的な学習の時間に行う。生徒たちは、様々な教科の学習内容に基づいて話し合い、茶のフードシステムを見渡した解決策を考えるものである。

(1) 本時のねらい

「おいしいお茶」を望む市場のために、多肥に陥る茶園がでてきた。その結果、大気中への一酸化二窒素の放出、地下水への硝酸性窒素の流出が進み、温室効果、オゾン層破壊、および健康被害等が懸念される。本時では、このような問題状況を把握し、消費者として何ができるかを考えさせ、CMとして発信させたい。

(2) 対象学年 第2学年

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入	○生活のなかの「お茶」を振り返る。 ・緑茶飲料の銘柄をあててみよう。 ・緑茶飲料を購入する基準は何だろう？	・ラベルをはがした緑茶飲料を試飲。 ・様々な意見を取り上げ、共有する。	
展開1	○茶園の環境負荷について考える。 ・茶園が多肥を行う理由を考える。 ・窒素肥料が環境に悪い点を話し合う。 ・多肥以外の対応について話し合う。	・萎縮した茶の根の写真を見せる。 ・N ₂ Oについて、総量、肥料由来の割合、温室効果、健康被害等を提示。 ・点滴施肥、石灰窒素肥料などを紹介。	茶園の多肥を、消費者の嗜好との関係で理解している。
展開2	○緑茶飲料市場の発展について考える。 ・I社の緑茶飲料の販売戦略について「飲料化比率」を用いて理解させる。 ・緑茶飲料市場を拡大させたのは、消費者のニーズか、企業の戦略かを考える。	・緑茶市場の拡大、茶園の経営面積の減少を資料として提示する。 ・自らの購買行動やCMの効果などを省みて話し合わせる。	消費者の視点だけでなく、企業の視点からも考えている。
まとめ	○有機JAS茶を推奨するCMを作ってみよう。	・有機JAS茶を試飲させる。 他社批判CM、公共広告機構型CMも許可する。	

4 生徒の反応（授業後の感想等）

窒素循環については、知らない生徒が多かった。(感想) 環境負荷の大きい静岡県を事例としたため、「茶栽培＝環境負荷」ととらえる生徒もいた。CMは、消費者に自己の消費行動を問い直させる作品(右図)が多く、感想文には有機茶の販売促進以外に、制度を構築する意見も見られた。(感想下)

生徒の感想

健康に良いというイメージがある緑茶なのに、実は環境に悪い(場合もある)なんて知らなかった。そのうえ、緑茶を作る会社の思い通り(?)に、消費は増えていく…。何だか嫌です。

多くの人は、価格や味をもとに購入するので、エコ商品は急激には増えないと思う。国全体の規制として有機栽培が義務付けられたりすれば変わると思うが。エコファーマーに補助金を出し、消費者が買いやすくなることで競争力を上げると良い。

CM作品事例

<p>1</p>	<p>【音声・効果】</p> <p>1(店主) 「いらっしやーい」 「お茶が安いよ〜」</p>
<p>2 店内</p>	<p>2(客)「このお茶は安くていいな。でもなんでこんなに安いのかな？」</p> <p>ガーン♪ [ネガポジ反転]</p> <p>(ナレーター)「わからなくていいんですか？」</p>
<p>3</p>	<p>3(ナレーター) 「わかって安心、飲んで安心、有機JAS茶」</p>

